10 『傷寒論』の「煎・熬」に対する、『方言』による解釈

○岡田 研吉[1]・郭 秀梅[2]

『輶軒使者絶代語釈別国方言』は、漢代の楊雄が漢代の中国各地の方言表記を採録した書で、漢、魏晋以後は『方言』と通称された。『傷寒論』と『方言』は共に同時代の著作であり、両書間には語言学的な関連性が認められている。江戸時代の多紀元簡・元堅、鈴木良知、喜多村直寛、森立之、山田業広等は、『傷寒論』の注釈において、すでに『方言』を引用して論証を行っている。今回は多くの興味深い問題の中から、『傷寒論』の「煎・熬」に対する、『方言』の記載を根拠にした考察を試みた。

『方言』巻七：熬炙煎熇鞏、火乾也。凡以火而乾五穀之類、自山而東斉楚以往謂之熬、関西隴冀以往謂之熇、秦晋之間或謂之炙。凡有汁而乾謂之煎、東斉謂之鞏。

① 煎

『方言』には「煎、火乾也。凡有汁而乾謂之煎」とある。この場合は「火で乾燥させる」意であり、「水からの煮出し」は意味してはおらず、「炙・煆・焙」に近い概念での乾燥である。多紀元簡は熬の意味について「十棗湯、芫花熬、又云芫花慢火炒変色。仲景郷語、云炒作熬。下凡言熬者、皆乾炒也」と按じている様に、熬は炒める意味であるとしている。

森立之が「宋後謂煮為煎、遂以煮薬為煎薬」と論述し、多紀元堅も「煮也者、投物於水、火以熟之之名。煎也者、火以乾汁之名也。古方於湯薬、則曰煮、去滓則曰煎。宋以来於湯薬、一用煎字、甚失古義矣」と論及している様に、宋代以前と以降において、煮ると煎じるの用語法には変化が存在している。

『金匱要略』の鼈甲煎丸と猪膏髪煎は、処方名として「煎」を冠している好例であり、具体的な煎じ方が詳しく説明されている。先ず煮詰めて薬汁を作り、乾燥させて膏薬に仕上げているが、この煎じ汁を丸薬に仕立てる段階を「煎」と表現している。則ち、汁を飛ばして乾燥

させていく過程の表現形式としての「煎」である。山田業広の『医学守株』に「仲景用煮煎字有分別、後世往々混用、謬者不少、『千金』猶然、況其下乎」という感嘆がある。

② 熬

『方言』に「熬、凡以火而乾五穀之類」と記載されている様に、宋版『傷寒論』の柴胡加竜骨牡蛎湯の牡蛎の炮製の熬は、火で牡蛎を乾燥させる事を意味している。また抵当湯(丸)の虻虫も熬と付記されており、同様に火で乾燥させてから水で煮る事を意味している。

即ち熬が「久煮」の意味あいで使用されてきたのは、唐時代以降の用法である。なお馬王堆の『五十二病方』の二方(「熬菱支一参、令黄、以淳酒半斗煮之」、「煮秫米期足、才熟、浚而熬之、令為灰」)における熬法は、煮法と対比させて記述してあり、漢代以前の熬法は火製を意味しており、陶弘景の『肘後百一方』の序にも「礬石熬令汁尽」とあり、南北朝時代の熬法も火製であったことを示している。以上のような理由により、仲景書中の熬法も、本来的には単純な火製を意味していたと思われた。

③『方言』による『傷寒論』の地方性の特定

煎を乾燥とし、熬を火製の意味として使用していたのは、崤山の東から斉と楚の国にかけての方言である。逆に熬を関西では熏と言い、秦晋では炙と言っていた。煎は東斉では鞏である。

他の『傷寒論』の用語に関しても、楚の国独特の用法は多く、多紀元簡も「仲景楚人」とまで言い切っている様に、『傷寒論』の成立と楚の国の関連性を示唆している用語法であると思われた。

(1) 東京町田市玉川学園岡田医院
(2) 順天堂大学医学部医史学研究室／北里研究所東洋医学総合研究所医史学研究部)